

編輯室より

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 7
ページ	7 0 - 7 0
発行年	1912-11-18
その他の言語のタイトル	編集室より
URL	http://hdl.handle.net/2298/9162

偉人として知られたるニイチエの叫んだ言葉であるが、かくの如きは、畢竟進化論より來りたる當然の歸結と言はねばならぬ。ヘツケルの放奔なる論風は更に進む。家族には勿論のこと、自身にも甚しき苦痛である病的生活を、是非にも續けて行かねばならぬ理由が抑も何處にあらう。生得的病弱者、精神病者、不治病者の多數は、近代の發達したる醫術によつて、御叮嚀にも、社會にとつても自身によつても何等益なき一命を取り止めてゐる。彼等不治病者の生存は實に家族、自治體、國家にとりて甚しき損失である。若しも一服のモルヒネによりて彼等の終焉を見るならば、浮世の悲劇は全くその跡を斷つてあらう。彼等にして正しくその死を欲するならば、無痛迅速に作用する藥劑によりて、自己を苦悶より救はしむべきではないかと。

こは純理性的な冷かな所論ではあるが、又一面には、如何にヘツケルの論風の豪放にして、世俗習慣に拘る所なきかを示してゐる。これ彼が一時甚しき社會の排斥を受けたる所以になると同時に、彼唯一の特長として多くの推服と賛同とを博せる所以であらう。

う。(朔)

編輯室より

○またいろんな都合で發行が遅れて誠にすみませぬ。しかし委員連にも不平もあれば愚痴もある。間違へば氣煩もあるし時には有難いと思ふ事もある。

○本號は多少特別號の意味も含んでゐる。で諸君の御投稿も已むなく次號へ廻した。どうか御承知を願ひたい。

○巻頭の奉悼の辭は部長本田先生の御執筆を煩した。茲に有難く御禮を申し上げます。未熟な連中がさにかくどうかやつてゆけるのは萬先生の御盡力によるのです。

○次號には新進松尾先生の御寄稿も仰ぐ事が出来ると思ふ。其他長江先生小豆澤先生坂田先生大塚先生などへも是非御願ひ申す覺悟です。連中辭令にならず。誠に恐縮してゐる次第です。諸君もどうか是非御願ひ下さい。

○諸君御自身も少し御投稿下さいませんか。次號も既に編輯に着手しました。

○連中も好い加減に疲れたり悟つたりして次號からもう龍南はいり書かうぢやないかなどごぼしてゐます。

○からりと晴れました好い秋の空ですね。

(あの騒々して十字街頭でいやな校正の筆をすて、
十一月十四日連中の一人)